



＜ふらりと訪れ楽しむ＞

工業都市から芸術までさまざまな顔を持つ街 バーミンガム

皆さんはバーミンガムというどのようなイメージをお持ちであろうか。英国第2位の人口を抱える大型都市、イギリスのへそと呼ばれるその場所、産業革命時代からの工業都市、最近では昨年行われたコモンウェルス・ゲームスの開催都市、いろいろな答えが出るかもしれないが、他のロンドン近郊の観光地などと比較すると、いささか影の薄い街であるのは否めないかもしれない。英国に観光にお越しになった方が、バースやオックスフォード、湖水地方などロンドンから少し離れたところへ日帰りや1泊2日などのショートトリップで観光されることは多いが、バーミンガムに行かれる方は非常に少ないのが実情である。

バーミンガムはロンドンから北北西に200キロ弱、日本でいえば東京から静岡、あるいは大阪から名古屋ほどの距離で、電車なら最速で1時間20分程度。現在開発中の高速鉄道HS2が開通した暁にはロンドンとバーミンガム（今のバーミンガム・ムーア・ストリート駅近くに新駅建設中）がわずか45分で結ばれるそうである。そんなバーミンガムだが、あるきっかけから関心が生まれ、涼しい夏の週末に1泊2日でふらりと訪れてみた。今回も大好きな英国鉄道での旅である。

話は少し遡る。毎年夏にロンドンで行われる音楽の祭典、BBC PROMS。今年も例年同様にロイヤル・アルバート・ホールで毎日開催されているが、7月27日は山田和樹さんの指揮のもと、バーミンガム市交響楽団によるオルフのカルミナ・ブラーナが演奏された。演奏が終わった後、スタンディングオベーションが10分以上続く素晴らしい演奏で、聴きに行った私も本当に感動した。私はクラシックの素人だが、そんな私にとっても、情熱的で、明るい色彩感を持つバーミンガム市交響楽団のサウンドが印象に残った素晴らしい演奏であった。山田和樹さんは2023年の4月から

バーミンガム市交響楽団（CBSO）の首席指揮者に就任されているが、彼はあるインタビューでCBSOのことを「音楽の楽しみ方を知っていて、それを表現することが世界一うまいオーケストラ」と評している。まさにその通りで、その場の聴衆を巻き込んで音楽を楽しませるといふ力がすごいオーケストラである。このPROMSの体験は、彼らの地元であるバーミンガムという街への私の関心を強めることになった。

もう一つ私のバーミンガムへの関心として、スチームパンクに対する興味がある。スチームパンクという言葉をご存じの方は少ないかもしれないが、カルチャージャンルの一つで、19世紀の蒸気機関の時代のイギリスなどをモチーフにした独特な芸術表現の仕方で、例えば日本のアニメーションでもその世界観を取り入れたものが結構ある。バーミンガムが大きく成長した時代、それはまさにスチームパンクの世界感とイメージが重なり、バーミンガムを訪れることで、どこかで今も残るそういう雰囲気に触れることができないかという期待もあった。

さて、話は今回の旅に戻る。8月のある日、旅のスタートはナショナルレールのEuston駅。個人的には普段ほとんど利用しない駅なのだが想像以上に大きなターミナル。調べたところこの駅の歴史は古く、ロンドン初の都市間移動鉄道の駅だったそうだ。今もその役割は変わらず、バーミンガムはもちろん、リバプール、マンチェスター、エジンバラ、グラスゴーなどのロンドンから北に向けて少し離れた大都市への鉄道の起点になっている。

少し早く着いたのでコーヒーを買って改札のオープンを待つ。駅の中には特にファストフード系のお店が充実。ほとんどのチェーン店が入っているのではないだ



ろうか。今朝の天気は曇り、気温は18度。今年の涼しいロンドンに旅するのに最高の季節。

8:22に改札がオープン。係員3名がバーコードリーダーを持ちチケットを確認する。無事通過していざホームに入る。8:40の定刻に自分の乗ったAvanti west coast鉄道エジンバラ行き(390系)は無事発車。この電車でバーミンガム・ニュー・ストリート駅まで行くのだが、乗り続ければエジンバラまで行けると言うので改めてワクワクする。

幸い、二人がけの窓側で隣は空席。車内は充電設備(電源、USB双方)と無料wifiが完備。少し面白かったのが、椅子の前に備え付けのテーブルが窓側席と通路側席で大きさが異なる。通路側は人が通やすくなるためか少し小さいサイズになっている。またこの390系は11両編成だが号車記号がA/B/C/D/E/F/U/G/H/J/Kと何故かFとGの間にUがあるのが面白い。またC号車にはサンドイッチなどの軽食を買うことができるショップがある。長距離特急らしい。

途中Coventry、Birmingham Internationalを通り電車は定刻から少し遅れて10:05にバーミンガムの玄関駅Birmingham New Streetに到着。大きな駅で早速方角を失う。まだ午前中だが人が多い。そしてやはり若い人が多い。



少し駅構内を歩き、まずは駅からも近いバーミンガム大聖堂に目的地を定め歩き出す。坂道を上るように歩くこと約10分、バーミンガム大聖堂に無事到着。

1715年に建てられたこちらの大聖堂は大きな前後のステンドグラスで有名だが、現在は共に改修中のため残念ながら見ることはできない。



英国でも小さい聖堂の一つだが、全体の作りは木製のバロック調の建物で落ち着いた印象であり、2つの金色のパイプオルガンが荘厳な雰囲気を出している。入り口のところに日本語など複数の言語での案内ボードが用意されていて簡単な解説を得ることができる。12月にはこの聖堂でメサイアのコンサートがあるようで、早束手帳にメモする。



次に訪れたのがThinktank科学博物館。イーストサイドのミレニアムポイントという超大型ランドマーク(イベント、研究開発スペース)の中にある博物館である。入り口で入場料を払った際に正直なところ「おお、高い」と感じてしまったのだが、出るときには全くそんな印象が吹き飛んでしまったほど素晴らしい博物館だった。

Ground Floorから1st Floorにかけてはまさにスチームパンク好きにはたまらない、蒸気機関時代からの様々な動力装置や大型工業機械の展示。動力機関などを子供たちが動かして楽しんでいる。圧巻は1779年に作られた世界最古の大型蒸気エンジンであるSmethwick Engine。大量の水が一気に流れる音が響く。





他にもバーミンガムの成長を支えてきた様々な乗り物が展示されており、直接見て歴史を感じることができる。2nd Floorからはちょっと展示が変わり環境問題や生態系の変化、更には宇宙まで、子供たちの世代や未来に向け様々な課題を投げかけ、考えさせる展示が並ぶ。特に環境問題については産業革命時代からの歴史の変化を小さな子供でも分かるような形で提示し、まさにバーミンガムという地にいるからこそ感じられる環境の変化が体感できる展示になっている。そう、下の階で実際に触れ、学んだ都市の歴史が現代環境にどういった影響を与えているかを、頭だけでなく身体で感じ、考えることができる。その意味では一見バラバラに見える各フロアのテーマが繋がっている。そのことに気づいた時、ここが実にしっかりと考え、作られた博物館であり、子供の学びの場としてはもちろん、大人でも十分に楽しめる場所だと感じた。



その後バーミンガムの街を徒歩で散策。バーミンガムは古い建物と新しい建築物の調和が美しい街でもある。途中、新しい建築物の1つの代表でもあるバーミンガム図書館に立ち寄った。何よりも驚くのがその外観と、建物の中の作り。巨大な建物はヨーロッパでも最大級の図書館と言われる。上層階で行われている展示も大変興味深い。また2階には建物の外にちょっとしたスペースがあり、目の前のCentenary Square付近を見渡せ気持ち良い。天気が良ければゆっくりするのにお勧めである。



その後運河沿いを歩いたりしながら西側の商業開発地区、Brindley place近辺を散策する。その一角に小さいがとても素敵な美術館があると知り、立ち寄った。IKONギャラリーである。期間で変わる展示物は現代美術。この時はインドネシアのパフォーマンスアーティストの展示がされていた。外の喧騒と離れ、静かな時間。バーミンガムの持つ別の顔が見えてくる。ちなみにこのギャラリーに行った際にはぜひ2つ体験してほしいことがある。一つは最上階から下りのエレベーターに乗っていただくこと、もう一つは出たところのカフェで一休みしてみる。エレベーターはネタバレになるのでこれ以上は説明を控えるが、カフェのテラス席は道を通る人を眺めつつ、気持ちの良い休憩時間を楽しむことができるのでお勧めである。



夕方、中心部のブロードストリートを歩いていると複数のカフェでロックミュージックのライブが開かれていた。賑やかな音が外まで聞こえてくる。ここも若い人がたくさん集まっている。やはりバーミンガムは若い人が多い。特に今日は土曜日、夜はこれからといった感じで楽しそうに歩く人が印象に残った。その後、ホテルに入り窓からバーミンガムの街並みを眺める。中心街をほんの少し離れるだけで、昔からの煉瓦作りの茶色い建物が並び街並みが続く。都市開発エリアを歩けば新しい建築物やストリート





アートなどが並ぶが、不思議とよくありがちな街全体の「ちぐはぐ感」を感じず、歩いていて心地良い街だった。坂の多い街でもあり、自分でも気づかなかったが歩き疲れたのだろう。夜はぐっすり寝ることができた。



翌朝は日曜日で天気も雨交じり。そんな中、朝飯をいただいですぐにホテルを出たが、昨日の夜と違って中心街もほとんど人を見かけない風景。すれ違う人もあまりいないブロードウェイを一人歩き、駅に向かう。昨日の夜の喧騒が嘘のようだ。

今日の午前中はバーミンガム大学構内にあるバーバー美術会館を見に行くことにした。バーミンガム大学 (University of Birmingham) は数多くのノーベル賞受賞者も出している歴史ある名門大学である。そんな大学の構内にバーバー美術会館 (The Barber Institute of Fine Arts) という美術館がある。世界的に有名なコレクションを持つ美術館で、バーミンガムを訪れた時には必ず立ち寄りたい場所の一つである。この美術館はバーミンガムの中心街から少し離れた場所なので、電車かバスでの移動が必要となる。今回は電車で向かうことにして、10:00のBirmingham new street発West midland trainで一駅のUniversity駅で下車。そこから15分ほど歩くとバーバー美術会館に到着する。入館料は無料 (任意寄附金) の決して大きくない美術館だが、ターナー、ドラクロア、モネ、マティス、ゲーンボロー、ルーベンス、ミレー、ゴッホ、ルノアール、すごい画家の作品が並んでいる。日曜日の雨の午前中ということもあったかもしれないが、訪問者も少ない中、名画をゆっくり鑑賞できた。またこの美術館は椅子があちこちにあり、鑑賞の途中で立ち疲れたら、静かな場所で一休みをすることもできる。

駅からこのバーバー美術会館へはバーミンガム大学の構内を抜けて行くことになるが、キャンパスの雰囲気なども味わいつつ、ゆっくり歩きたい。



バーミンガム中心街に電車で戻る。旅の残り時間も少なくなってきた。旅の締めくくりにバーミンガムでCBSOの生演奏を聴くことも考えたが、PROMS期間のこの日はコンサートの予定がなかったため、今回は少し趣向を変え、ディズニーミュージカルのライオンキングを見ることにした。舞台はチャイニーズクォーター (小さな中華街) の中にある劇場、バーミンガム・ヒポドローム・シアター。ここはバーミンガム・ロイヤル・バレエのホーム劇場として有名だが、演劇やパントマイムなど多様な舞台が催されている。1895年に設立されたこの劇場は小ぢんまりとしているが、人が行き交うパブリックスペースや劇場の中のレトロな雰囲気が素晴らしく、鑑賞前後も含め素敵な時間を過ごすことができる。

14:30から途中休憩を挟み17:00過ぎまで、あっという間のとても素晴らしいパフォーマンスだった。特に日曜日の昼時間、ライオンキングという演目からか子供と一緒に楽しむ家族連れが多かった。

冒頭のCBSOのPROMSの演目でもそうであったが、演者に対する観客の反応が日本とイギリスでちょっと違う気がするの自分だけだろうか。日本では盛大な拍手で反応するのが基本である。イギリスも拍手が基本ではあるのだが、歓声や指笛など一人一人が自分の感動を自然に伝えたい方法で反応する。この日のライオンキングもそうであった。最後のカーテンコールではもちろんながら、各シーンの終わり、時にはシーンの途中であっても各自が思い思いの表現でキャストへ感動を伝える。誰かがやっているからではない。自分が感動しているのであれば伝える。そうすることで演者と観客、それを包む会場全体に自然と不思議な一体



感が生まれていく。一度この体験をするとまた行きたくなる。かく言う私もその魔力にはまってしまった一人である。

劇場を出ると既に夕方。夏なのでまだまだ空は明るい
が、そろそろロンドンに戻らねばならない。

Birmingham new streetの駅まで歩き、Euston行きの電車に乗り込む。バーミンガム始発電車なのに満席に近い乗車率。座ってすぐに電車は動き出した。電車で揺られながらバーミンガムで過ごした時間をぼんやりと振り返る。バーミンガムは工業都市としてイギリスの発展を支えた街だが、その歴史を街のDNAと



して大切に残しつつも、新たな価値観を受け入れ、それを尊重することで、若い年代の新しい力呼び込み次の発展を生み出そうとしている。バーミンガムはM Xという街だ、と言では語れないことこそバーミンガムの持つ魅力であり、街の強さでもある。今回は芸術関係の体験が中心ではあったが、子供と一緒に水族館やレゴランド、チョコレート工場、街歩きなら運河クルーズなや公園、警察博物館など様々な楽しみ方がある街である。予めスケジュールを詰める旅も良いが、天気の良い週末にちょっと時間ができたからフラッと訪れる、そんなバーミンガムの旅もお勧めしたい。

ジャルパック 中井策太郎



バーミンガム中心部イメージ図（実際の縮尺や方位と異なります）

